
魔王は死んだ 老衰で

藍洞 伽藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王は死んだ 老衰で

【Nコード】

N0568U

【作者名】

藍洞 伽藍

【あらすじ】

魔王代行の苦悩とぶつとんだ魔界の住人たちが織り成す日常。

活動報告のアイデアを文章にしたもの、好評ならば連載もありうるかも！？

もう一つのほつも宜しくね！

(前書き)

魔王代行の苦悩とぶっとなだ魔界の住人たちが織り成す日常。

8月31日 文章追加。

「……めんどくせ」

獣族のライカンスロープ種と来たら脳筋ばっかだしよ……

いいから隊列守れつての、お前の所だけ自由に動きすぎなんだよ。もう遊撃に回すか？

官僚は官僚でいつもこいつもエリート気取りの癖に打たれ弱いしよオ。

ていうか文官が異常に使えねえ。先代の奴、人材育成怠けてたんじやねえか？

そりゃ在位が五千年も続けば気が抜けるのも解らんでも無いが。

『こんな仕事私には相応しくない』だとか『もつと私にあつた仕事がある筈だ』だと？

アホか！ どの選民思想に凝り固まったんだこの勘違い野郎ども！

仕事始めたばかりの新人社員じゃねえんだぞ！ お前ら何年その仕事してるんだボゲエ！

ああいや、もしかして強く言つと直ぐ辞めちまうからか？ うわ、もつと救いようがねえ。

魔王が空位になつても軍団指揮は俺の管轄なのは変わらんし。

ただでさえ指揮系統が一部混乱して俺の所まで内政の案件が紛れ込んできてクソ忙しい時によオオオオオ！

おまけに人間の動向を探ってる魔族のドッペルゲンガー種から来た報告で更にややこしくなりやがった。

「ゆうしゃ（笑）ね…… こりないね、あのアルムの白豚クンどもは」

前にぶツ潰したのは何時だったかな…… 大体五百年くらいまえか？

ハツ！笑っちゃうね。これはあれか？

『あなたこそ えらばれし ゆうしゃ』なんて言ったり『どうかこのたいりくに へいわを』とかぬかすのか？

カーツ！ 呆れてものが言えねエゼ！

魔族はみーんなてめえらなんか興味ねえよ！ 心底どうでもいいわ！

大体な、魔物と魔族を一緒くたにすんじゃねえ。

それって動物と人間が同じだっていうのと変わらないんだぞ。むしろ人間の方が動物より陰険で腹黒だから性質が悪いんだが。

魔物の数が増えたら魔王の所為だなんてトンでも理論抜かしやがって。

その魔王が老衰で死んだばっかだったのに、んな訳がねえだろうがよ！

魔物の生息地域を乱開発したのが原因だろうが！ 因果応報の体現者共はそんなこと気付きもしやがらねエ……

ドタドタと騒がしい足音がだんだんと近づいてくる、又なんか厄介ごとでもできたか？

足音の主は執務室のドアをノックせずに勢いよくバァンと開いた。

「魔王さま！ 代行を付けるこの薄らハゲ！」 ツツ、申し訳ございません代行さま

「どつしたア」

最近頭の寂しくなってきた彼は翼人族の壮年の男だ、薄らハゲと言われて少し悲しそうな顔をしてたがコレだけは譲れん。

「勇者と名乗る者が門の前に来ています！」

「……ア？」

手元の書類をもう一度確認する、日付が十ヶ月前になっている。

「ふざけんな！」

「ど、どうしましょう？　なんだか様子がおかしいそうなのですが

……」

「あー、そうかもな……」

魔界と聞いて人外魔境でも想像してたんだろ？

残念でした、俺たち魔族の国はそんな場所じゃない。

「恐らく面食らってたろう。向こう側より遥かに文明的な国だったことによ。話を通じそうな相手だったか？」

「凄まじく挙動不審ではありませんでしたが。国境警備隊に海岸で救助されたらしく、とても大人しくしました」

「んじゃ、謁見の間に通して。俺も直ぐ行くから」

「はっ」

執務室に備え付けられた浴室で軽くシャワーを浴びて頭を切り替える、書類の山で本来の執務室が機能しなくなりつつあったので客室の一つを仮の執務室にしたが、結果的には良かった。

装いは……二級軍服でいいか。鏡で顔を確認する、やっぱり薄くだが眼の下に隈ができてやがる。

ちと礼儀には反するがフード付き外套で顔を隠すべきか、顔立ちで俺が元人間だってバレるかもしれないしな……

「さて、面白くなってきやがった」

窓の外へ視線を向ける。

突き抜けるような蒼い空。正面遠方には薄っすらと見える紅色の

火炎山とカシミール山岳からなる峰が続く。西には黒の森、東にガ
ラリア海峡から取れた海の幸が集まる漁港。

少し視線を下方へと移せば石畳と焼きレンガの家屋が美しい王都
ルル・イエ。

国土は人界の五倍以上、我々ですら把握しきれていない領土が存
在し、建国五千年を過ぎた今日も軍を率いて調査の日々だ。

人界は既に殆どが踏破されつくしたようだが、この魔界には未だ
見ぬ場所が存在する。

五倍以上つても今の所の概算だしな…… とても住めたもんじ
やない土地もあるし。

のんびりと空を飛ぶ翼人の配達業者にじやれる小型の竜種パーン
ドレイク…… ってあつぶねええええ！

「おいしいいいい！ ペットの放し飼いは駄目っていったらるうが
もおおおおおおおお！」

「魔王様！早くしてください」代行だっって言ってるうがハゲエ！
一本も残らず剃り尽くしてやろうかあ！」申し訳御座いません代行
様！」

開口一番「ええ〜？」っと言わなかった自分を褒めてやりたい。
想像以上。いや、想像以下というべきなのかな？

緊急事態だ、今にも顔が歪みそうだ。主に苦笑いで。

とりあえずハゲに念話で確認せねば。

《おい、これがゆうしゃ？（笑）どころじゃねーぞ？》

《私も報告で大まかにしか聞いていませんでしたが、これほどとは
……》

謁見の間で居心地悪そうに赤絨毯の上に正座している男をみる。
座るな座るな。

かつぺだ、かつぺがいる。田舎っぺ。絶滅してなかったのか……
年は十五、六くらいのガキンチョ。まあ、一応成人なのでガキで
はないのかもしれんが。

《今時革鎧ってどうなのよお、地方自警団でも鉄使つとるわ!》

《文化の衰退が著しいですなあ…… もうだめっばいですが、人界》

「お、オラはエイジスっていうんダス。

アルムの辺境にあるカルナっていう寂れた農村出身で、建国記念日
に首都へ野菜や穀物を売りに行ったら。『勇気の剣』が一般に

公開されるって小耳に挟んで、こりゃ一生に一度あるか無いかの好
機だと…… 皆、有り難がって柄を触ってたもんだからオラも

触ったんだども。突然光りだしたんだ!そしたらあれよあれよと勇
者の再来だと担ぎ上げられて……」

沈痛な面持ちで語るゆうしゃ（田舎っぺ）エイジスくん。

鼻水垂らしてんじゃネーヨ、拭けよ。絨毯に付いたら舐めて拭き
取らせるぞ。

悲壮感溢れる声で語るこれまでの悲惨な旅、だがそんなことは一
応聞いていたが聴いてはいなかった。

《ほあちゃー! アレかあああああ!》

《ほらほら! だからさっさと処分しておこうって言ったんですよ
!》

《じゃつかあしい、先代の決定だろうが! 家臣一同で面白がつて
賛成したの憶えてるんだからな!》

《私は否定しましたああああ!》

《うっせえ! 念話で叫ぶな!》

《理不尽な！》

脳裏に過ぎるのは嘗て起こった人魔戦争。

その頃はまだ亜人と魔族の仲もそれほど良くなく、魔族は部族ごとに分かれていた。

人族も亜人族も魔族も世界の色んな所に散らばっていた。

習慣や文化の違いで小競り合いが頻繁に起こってたのだが、アルムの醜い白ブタ君達が何をトチ狂ったのか。ある日、その小競

り合いを強襲。

特徴的な外見の多い両陣営に向かって事にあるつか『醜い邪教の使徒』と抜かしやがった。

贅肉でぶくぶく太ったブタにだけは言われなくなかったろうな、ぶちぎれた両陣営が電撃的な速さで亜人族と魔族の同盟を決定

、始まって三ヶ月で今のアルム聖教国を残して完全制圧。共通の敵が現れるとホント動きが早かった。

首都を包囲され兵糧を絶たれ、最早滅びるしか道は無いと思われたとき。逆転の一手を狙ったブタ君はどっから引っ張り出して

きたのか、『異世界召喚法』で異界から『勇者』を呼び出した。

しかし、呼び出された『勇者』はブタ君をひっ捕らえて亜人族魔族の混成連合軍の前にしよっぴいた。

騒動の首謀者と引き換えに不可侵条約を結んで何とか許してもらおうって事なんだな。

そんな勇気ある行動に先代魔王が悪乗りして『勇気の剣』なんてシロモノを作って『勇者』にあげたのだった。

使われた魔法陣を解析して勇者を送り返し二度と使われないように破壊したものの、記録していたのか定期的に引っ張り出して

また呼ぶっていう事がその後も起こったのだがそれは置いておく。
そんな戦争とも言えん人魔戦争がおこって今の人界と魔界って線
を引いたのだ。

あと、人間を根絶やしにはしなかったのは一部の老害どもの所為
だと解っていたからなんだよな。

制圧って言っても降伏勧告して回ったのと聖教国の力を削ぎたい各
国がここぞとばかりに手伝ったからでもあるし。

《アレ、光の属性は有るとはいえ。光るだけなんだよな……》

《ええ、適正のある者は向こうでは滅多に生まれませんがね。
不憫な……》

先代のお遊び、勇気の剣という名のライトセーバーもどき。

切れ味は鋭いけれど名剣という程ではない。

知恵を仕込んだのは俺。

責任を感じないでもない。

「あゝ、聞いてますか？」

「ああ、聞いている聞いている。そいつはおいしそうだ」

「ちっとも聞いてねえだ！」

「冗談冗談、今後の事だろ？ どうすんの？ 死……帰るの？」

「死ってなんだすか！？」

《それ、土に還元る（かえる）じゃないんですか？》

《そうともいう》

《いいえ、そうとしかいいません》

「もう国に帰れねえ、出来ればこっちで暮らしてえ…… オラもう

あんな国嫌だ」

「あー、それじゃあ手続きしてもらって。おーい誰かー」

オラコンナムライヤダーという歌詞が浮かんだ、国だけど。

ぱんぱんっ、と手を叩く。これでホントに人が来るのが凄いとこ
ろ。

これも仕込むのかなりめんどかったんだよな。

音も無く扉を開けて侍女さんが現れる、メイド服なのはやっぱり
先代の趣味でしかもそれが人気になり今では女子のなりたい職

業NO.1だ。

ドナドナよろしくかっぺくんを引っ張っていく。あいつDSのメ
イド長じゃねえか！人選大丈夫か？もうメイドってか冥土って

感じだし。そいつ一応ゆうしゃなんだけど。

癒しが欠片も感じねえ、どうすればあそこまでアンチ癒し系にな
れるんだか。

怯えて顔が青くなってるかっぺゆうしゃが扉の向こうへ消え。足
音が遠ざかり聞こえなくなったころ。

ハゲと同時に溜息をつく。

「ブタ君もどついう統治してんだろねー」

「覗けばいいじゃないですか、自慢の眼で」

「そうだけだよ、そんな暇あるなら仕事するわ」

「さすが魔王様、そこに痺れるあこがれ」

「お前今月の給料三分の一な」

「なんですとおおおおおお！」

で、だ。何でさっきより執務室の書類が増えてるんだ？

机の上に書類の山が、二つ三つ。

オマケに床には机の上の山と同じくらいの高さまで詰まれた書類

が三つ四つ。

「なんというっ、なんという速度！ この侵攻は何時まで続くんだ
」！」

右から左へ流れるように確認作業、判子が必要なものにはぺったんぺったん。

目が痛くなる、腕が痛くなる、肩が辛い。

オイ、これ部署違うじゃねえか。他に分けてっつと。

あ？ 何で経費コンナにかかっているわけ？ 後で問い詰めなきや。願書混じってんぞ？ 人事部に遅れよ。

クソ！ この書類もじゃねえか、取りあえず送っところとか思っ
てんじゃねえぞ！

嫌がらせか、責任者でてこいつ！ っつ俺だ。

ぺったん ぺったん。

「つるぺったん！ っつイカン、電波が入ったか」

ぺったんこ ぺったんこ ぺったんこ。

「ぺったんこ！ ぺったんこ！ ぺったんこ！」

流石に二日連続徹夜のせいでテンションが可笑しな風になっている。
る。

ふっ、と人の気配がする。扉の向こうでヒソヒソ声、聞かれたよ
うだ。

やっぱり…… そういう趣味で。

お疲れじゃ…… いえ、ありうるわね。

「やっぱりってなんじゃああああ！ 聞こえてんぞお！」

ささーっと気配が遠のく。ありやメイド隊か、また変な噂が流れるだろう。

あいつ等伝言ゲームみたいにどんどん着色して面白おかしくするから悪化するんだよなあ……

腐ってやがるし矯正するのが遅すぎたんだ…… いや、巨神兵みたいに言ったって無駄だが。

腐女子なんて年齢じゃねえ癖に。誤腐人しごいんか奇腐人きふじんが相応しいかもしれん。

生きているのに腐っているという手の施しようが無い状態。

前にも俺の事を同性愛者みたいに言いやがって、本気でどうにかせねばな。

どうやったら悪化していく持病の『ぢ』についての話しがそこま

で変化するんだよお！
医者曰く、座りっぱなしだから臀部の血流が停滞するのが原因の一つだ。

来る日も来る日もデスクワークの所為で最早職業病である。

判子押しして判子押しして判子押しして判子押しして、気が狂ってしま

そうだああああ！
分割思考の所為で狂うこともできねえが、俺が狂ったらこの国傾

くぞ。
早急に時代の魔王を決めたいが適任者が居ないという問題。

「どーしたもんかねえ……」

それにしても最近独り言が増えたなあ……

「代行さまあ！」

ドアが『メメキヤア』と突き破られ、何者かが進入してきた。何者ってというか冥土長だった。普通に入って来い。

「代行様、仕事の最中に卑猥な言葉を連呼していたそうですね。死ねばいいのに！」

「否定できないのが悔しいっ！」

「貧乳至上主義でしたとは知りませんでした。で…… 誰が絶壁ですか？」

「一体この短時間で何処まで悪化したあ！」

怪しく煌めく眼光。『イリルアイ魔眼』をこんな事で使うな。

大体そんなこと言っただけえし。

「てーか絶対解ってて言っただけだろ。」

ちなみに冥土長の胸は成長期が冥土送りされている。

だからそういう話題には過剰反応するし、胸の発達したメイド達には親の敵を見るような目をする。

「代行様？」

「あー、取りあえず冥土長。そんな事をお前に吹き込んだ不届き者を教える。靴にGを仕込んでやる」

「ふむ…… またあの子達の悪戯ですか、懲りない子達ですね」

よし、冷静になった。こんなこと毎回やってればいい加減学習するわ。

それにしてもそろそろこの置きも効果が薄れてきたのか……
うーん、今度は蟲風呂にしてやるわ。

その日の夜、二名のメイドが姿を消した。

翌日、髪の毛先まで真っ白になり憔悴しきつたメイドが居たとか居ないとか。

彼は知らない。

彼以上に魔王らしい所業をしている者も、国を支えられる者も居ないだろうという評価を。

彼は知らない。

魔王に名乗りを上げた者達が執務室に縛り付られた結果『ぢごく』とやつれた顔で仲間語ったことを。

彼は知らない。

彼が代行と言っても、既に仲間内では畏敬の念を込めて『大魔王』と呼ばれている事を。

(後書き)

駄文に付き合ってくださいありがとうございます。とう御座いました。

宜しければご感想をお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0568u/>

魔王は死んだ 老衰で

2011年10月8日14時07分発行